



学内学会会報 第23号

「宮田加久子先生を偲んで」

茨木 尚子

(社会学部教授・社会福祉学科)

2014年春、大学キャンパスはまた新たな年度を迎えた。そこで宮田先生の溘刺とした声や姿に出会えないことが未だに信じられない。どこからか先生が現れて、またお会いできそうな気がしている。

昨年12月の最後の日、宮田先生の告別式に参列するために広尾教会に赴いた。本当に多くの方々が参列され、私が案内された2階席も沢山の方で埋め尽くされていた。周辺には多くの若い研究者と思しき人たちがいて、涙を流しながら先生とのお別れのときを迎えているのが印象的であった。明治学院大学以外でも、宮田先生は本当に多くの若い研究者をサポートし、彼らに慕われていたのだなあという思いを強くした。

宮田先生は、多様な人びとをつなぐ強力なネットワークャーだった。私自身、社会学部附属研究所のプロジェクト研究で、宮田先生とご一緒の共同研究に参加させていただく中で、沢山の人たちとの「ご縁」をいただくことができた感謝している。

先生とは、1996年4月に社会学部に着任した同期であり、初めてお会いしたのは、その年の3月、当時の学部長であった橋本茂先生が村上先生を含めた新人3名の歓迎会を催してくださった際であった。「社会学科の今度の人事は大成功。宮田先生には社会学科の将来を期待したい。」と橋本先生があまり強調されるので、社会福祉学科の二人は多少いじけて、「期待されないけど、がんばろう」と帰り道でお互い励まし合ったものである。

宮田先生とより深くお付き合いさせていただくことになったのは、2000年にスタートした社会学部附属研究所の特別研究プロジェクト「現代社会における技術と人間」であった。このプロジェクト研究は、当時研究所調査研究部主任の西阪先生が全体統括者となり、3年間にわたり行われた両学科教員のコラボレーション研究活動であった。研究プロジェクトは、大きく3つの研究班に分かれ、このうち第三グループ「新しいメディアとソーシャルサポート」の研究計画を立てら

れたのが宮田先生と野沢先生であった。私は、社会福祉領域の当事者活動研究という領域から、一緒にこのテーマで研究しないかとお二人から声をかけていただいた。当時はインターネットの普及がまさに日進月歩の時代であり、それをどうマイノリティの交流や活動に活用できるのか、またそれはこれまでの活動にどう影響を与えるのかという点で、まさに興味深いテーマであったので、すぐに研究に参加させていただいた。

1年目は、特にオンラインのソーシャルサポート研究の宮田先生、ネットワーク研究の野沢先生からの先端研究の情報についてお話を伺うことで、多くのことを学ばせていただいた。2年目からは、ちょうどオンライン上で交流が始まったステップファミリーの当事者の人たちとの共同研究、及び当時政府からの助成もあり各地で一気に活動が展開されていたシニア層のインターネット活動の調査研究の二本柱で調査研究がすすめられた。研究過程において、宮田先生はどんどんご自身の持つ社会資源を提供され、その結果、広島大学の浦先生が研究メンバーに加わり、シニアネット調査では、せんだいメディアテークのセンター長であった奥山恵美子氏（現仙台市長）を通じて、仙台シニアネット関連の調査等へと協力の輪が広がっていった。宮田先生の研究リーダーとしての手腕は見事であり、効率的にシニアネットの主要メンバーへのインタビュー調査が実施され、メンバーへのパネル調査へと展開することが可能となった。

この共同研究では、仙台以外にも、大阪や広島への訪問調査が実施されたが、その際、フリーの時間に一緒に食事をし、ちょっとした小旅行も経験した。「茨木さん、立ち食いってしたことある？」と、大阪の「二度漬け無し」の串揚げ屋さんで、生涯で初めての立ち食いにチャレンジした際の宮田先生のドギマギした様子は、これまでの調査リーダーとしての颯爽ぶりとはちょっと異なり、それだけは「勝った！」と思ったことも、安芸の宮島で撮ったご当地限定プリクラ写真も

今では懐かしい思い出である。

宮田先生は、ご自身が集められた国内外のインターネット研究の最先端の情報を惜しげもなく提供くださった。「インターネットのサポート研究ではこんな疾病患者の調査があるのよ」と、英文の調査論文を紹介していただいた。それはアメリカで、どういった疾病罹患者が一番多くオンラインで交流しているかをチャットの交流結果から明らかにした調査であった。大変興味深い内容で、それをもとに私自身も当時日本で盛んであったオンラインでの疾病別サイト開設についての実態調査を行い、当時全く未知であった慢性疲労症候群の患者によるサイトが日本でもかなり多いことが明らかになった。そこから慢性疲労症候群という名称も含めて、社会の偏見にさらされ、国の難病対策の枠組みからも除外され、いわゆる制度の谷間に放置されてきた病であることに気づくことができ、現在はこの難病の患者会の方との活動や研究を続けている。そんな「ご縁」をいただいたのも、今思えば宮田先生から紹介された1編の論文であったと思うと、先生の情

報力とネットワーク力への感謝の気持ちで一杯である。

ご自身、最後まで病床で研究論文に目を通しておられたと娘さんが告別式で語られていたが、そういった情報を自分だけのものとするのではなく、常にフェアに周囲の研究仲間や後輩に伝えておられたのだろう。宮田先生の蒔かれた研究の種はいろいろなところで芽生えており、きっとこれから多様な場で育っていくことと思う。

先生はこの数年間闘病が続いておられたが、最後は「病との共存」という言葉を皆に残されていたと聞いている。「同じ病気の人のオンラインコミュニティは大事よね。私も随分利用しサポートを受けることができたし、アドバイスも書き込んでいるのよ。」と語っておられたが、そこでのネットワークのお話ももっと伺いたかった。宮田先生のことだから、天国でもきっと研究を続けていらっしやると思う。先生、これからも社会学部をしっかりと天国で見守っててください。

「むかしMattoの町があった」上映会報告

上映会企画担当 森田 征弘（社会福祉学科4年）
柳澤 菜月（社会福祉学科4年）

学内学生会生部会は、2013年6月10日に白金校舎大会議場で、「むかしMattoの町があった」という映画の自主上映会を行った。この映画は、精神保健という一般人にはあまり馴染みのない分野についてのものだったが、定員70名を上回る81名の方にご参加いただいた。参加者の中には、明治学院大学の学生や教員以外にも、大学外の精神保健福祉士やコミュニティソーシャルワーカーといった支援者の立場の方、障害の当事者やその家族といった方々にもお越しいただいた。

この映画は、イタリア精神保健改革の父と呼ばれているフランコ・バザーリアの半生にスポットを当て、イタリアの精神保健改革を描いた作品で、第一部と第二部で構成されていて、上映時間は3時間18分にも及ぶ大作である。

第一部では、精神病院内での改革に奔走するバザーリアの様子が描かれている。冒頭はマルゲリータという少女が、色恋を機に母親から見捨てられ、ゴリツィア県立精神病院に入院するシーンから始まる。その病院の院長に赴任したバザーリアは、檻に閉じ込められたマルゲリータや、保護室のベッドに15年間も縛り付けられて体を洗う際には屈強な男性看護師に取り押さえられ、無遠慮に水を浴びせられるボリスという男

性をはじめ、「治療」と称されながらも苦痛の表情をあらわにする入院患者の実態を目の当たりにする。そういった病院の収容所的な雰囲気や打破しようと、バザーリアは病院の改革に着手する。病院の周囲を囲っていた高い柵を取り壊し、入院患者達同士の交流の場の設置等、環境の改善を行っていった。最初は病院の職員のみならず、入院している患者達からも反発を受けたが、それでもバザーリアは改善に向けた活動を行い続け、反発していた患者達からも次第に受け入れられるようになる。そうした結果、長年病院に入院されていた患者達が、日中の一時外出、さらに家族のもとへ一時帰宅が出来るようにまで改善された。その一方で、職員たちの中にはバザーリアの急進的な改革に対して不信感を募らせる者たちがいた。そうした中で、家族のもとに一時帰宅していた患者が起こした事件をきっかけに、バザーリアは病院長のポストを追われるところで、第一部は終わる。

第二部は、病院内だけでなく法律・制度の改革を政府に対する活動の様子も描かれている。第一部から2年後、トリエステ県代表がバザーリアに県立サンジョヴァンニ病院長への就任依頼をするところからはじ



まる。これに対してバザーリアは、資金は提供するが運営等に一切口出ししないという「白紙委任状」を条件に院長の職を引き受ける。サンジョヴァンニ病院では、以前院長を務めていたゴリツィア病院で協力的であった看護婦や、入院患者としてマルゲリータやボリスとも再会する。再び病院内での改革を進める一方、政府に対して精神病院の廃止を訴えていくが、なかなか理解が得られず前進しない。マルゲリータやボリスが恋愛を経験する一方、バザーリアや他の職員は障害者のことを中心に行動していることを自分の家族から疎まれるようになる。やがて病院が縮小され、その代替として24時間オープンな精神保健センターに機能が移され、患者たちも地域で暮らすようになる。周辺住民や業者からは理解が得られず偏見の眼差しが向けられたが、自分たち自身の思いをぶつけることで、徐々に理解されていった。バザーリアの夢が次第に実現されていこうとする中で、本人は慢性的な体調不良に悩まされることになる。1978年、イタリアの精神病院を廃止する新しい精神保健法（180号法）が国会においてほぼ全会一致で可決。様々な課題は残されたがバザーリアの夢は一応の実現を見て、マルゲリータやボリスも紆余曲折を経て人間としての復権を果たす。それを見届けるように、脳腫瘍を患っていたバザーリアが死の床につくところで第二部は終わる。

この第一部では前半部分において、入院患者への「治療行為」と称しながらもとてもそうとは感じられない行為が行われる場面が多く見られる。表現は抑えられているものかという衝撃的なものであった

第二部では衝撃的な第一部に比べると、それまで「入院患者」とされていたマルゲリータやボリスの恋愛模様など、「ひとりの人間」としての描写が多くなる一方、バザーリアは政府への働き掛けが実を結ばな

かったり、家族、特に息子から冷たい眼差しを向けられたり、また脳腫瘍を患うなど、現実に対して苦悩する場面が多くみられる。

来場者の方からも特に第一部に関する感想が多く、「精神障害者の人権について考えさせられた」、「全く人間として扱われておらず、酷いものだと感じた」、「現在の日本でも非人道的扱いがなされている問題があるのではないか」といったものが寄せられた。

また第二部や全体を通して、「バザーリアの取り組みに対する熱意と苦悩が伝わった」といったもの、日本における精神病院に関することなどのご意見、ご感想をいただいた。

この作品は1960~70年代の実際の出来事をベースとしているが、精神障害者への非人道的扱いが第二次世界大戦後に実際に行われていたものであると考え、今日の精神保健福祉の体系がいかに歴史の浅いものであるかということを痛感させられた。それと同時に、果たしてこの作品に描かれている当時の状況や人々の考えは本当に過去のものであるのだろうか、今日解消されているのだろうかという疑問を感じさせられた。

この第一部では院内における精神障害者の非人道的な扱いやそれを解消しようと奔走するバザーリアの姿といった当時のイタリアの状況を伝えるだけでなく、今日の精神保健福祉の現状に何かを訴えかけるものではないかと考えており、来場者の方の多くがそのことについて何か感じ、考えるきっかけになったのではないかと感じた。

第二部では、精神病院の解体、地域移行に対して周辺住民や政府から理解が得られない描写があった。これは40年近く経った現在においてもなお見られる光景である。

このシーンから感じたことは、理解を得るためにはどちらか一方が動くのではなく、双方が歩み寄ることが大切であるということだ。住民は固定観念に囚われずにその人を見ようとする、また障害者も自分自身を訴えていき、互いにその人のことを理解しようという気持ちがあれば差別や偏見といったものが次第に無くなっていくのではないだろうか。

今後日本では2018年から精神障害者の雇用が義務付けられるため、互いに理解し合い協力し、信頼関係が築ける環境づくりをしなければならないと感じた。今回、この作品の上映会を通して来場者の方はもちろん、自分たちも精神保健福祉について理解・考えを深めることができ、十分価値があり有意義のものであった。

今回の上映会は、本学教授で、「バザーリア映画を自主上映する180人のMattoの会」の会員でもある村上雅昭先生のご尽力で実現することが出来た。村上先生ならびに、「180人のMattoの会」事務局の方々に厚く御礼申し上げます。

総会後の特別講演会

「津波被災地復興支援活動と社会学

—岩手県上閉伊郡大槌町吉里吉里を事例として—」に寄せて

小林 大騎（社会学科3年）

2013年6月25日、第23回総会後に、本学社会学部社会学科教授である浅川達人先生による特別講演会が行われました。浅川先生は「津波被災地復興支援活動と社会学—岩手県上閉伊郡大槌町吉里吉里を事例として—」というテーマで、1時間にわたる講演をしてくださいました。

『吉里吉里』は、岩手県の三陸沿岸にある大槌町にあります。浅川先生は、震災直後の2011年4月20日に訪れて、当時の吉里吉里の様子を映像として記録しておられ、その映像を講演会で公開しました。映像はとても悲惨な状況で、東京にいた私たちには想像もつかないものでした。道の両端には、瓦礫の山が積み重なり、遺体を手作業で探がしていたというお話でした。

また、講演会直前の2013年6月23日の映像も公開してくださいました。震災直後の瓦礫はほぼ撤去されており、全体的に草が茂っていました。基礎を壊したうえで、もう一度街づくりを始めていくところだそうです。集合住宅として建てられた吉里吉里の災害復興住宅には、始めの頃は、住民はあまり住んでいなかったといいます。理由としては、従来広い土地で広い家に住んでいたゆえに、集合住宅は好まれなかったそうです。そこで行われている復興支援活動とはどのようなものなのか。

浅川先生は震災直後から、今に至るまで、月に1回程度の割合で被災地の現地である吉里吉里を訪れ、復興支援活動を行っているとのこと、その概要を話されました。「復活の薪プロジェクト」は、活動の場かつ雇用の場をつくることを目的とした「薪づくり」をし、全国へ販売する活動だそうです。雇用の場をつくることで、地域が活性化し、人々が動き始める。地域の復興を手伝ってくれる若者がいることが現地の人々を力づけるのだそうです。「復活の薪プロジェクト」は5,000袋を完売し、第2章に及んでいます。また仮設住宅への生活サポートとして、高齢者の人々に郷土料理の「こまこま汁」を習う活動もしています。被災地の高齢者に対し、学生が「こまこま汁」を習いに行き、役割支持を行うことで、高齢者の活性化を促しています。そして、『吉里吉里語辞典』をアーカイブ化する活動もしています。方言、つまり言葉は生活を表し、伝統的な生活を保存、地域文化保存を促すことができるといいます。方言を聞いて回ること

で、コミュニティにおける誇りと共同性の回復を目指しています。また大槌町の水産加工業者4名が立ち上げた「立ち上がれ！ど真ん中・おおつち」と「一頁堂書店」への支援活動も行っているそうです。

最後に、なぜ知識も技術もない学生の参加が、支援になるのかについて話してくださいました。それは支援者の存在が支援に大きな影響と与えるからだといいます。応援してくれる人がいるからくじけずに頑張っていこうと思えるのだそうです。震災により多くのものを失ってしまった被災者が、地域への誇りと愛着を再確認し、復興の足掛かりとなるのです。これは、「こまこま汁」の作り方を教えることや吉里吉里語を思い出すことによって行われているのです。

浅川先生は、今後必要となる復興支援活動として、4点挙げられました。「人口流出に歯止めをかける」・「住民自身の取り組みを後押しする」・「交流人口の拡大」・「まちのブランド化」の4点です。被災地に被災地の人間ではない人が行くことで、新たな解決策が見出せるそうです。ただ被災地のために力作業のようなボランティアをするのではなく、文化の再確認、地域の再構成、人々の活性化を促すことが重要なのだといいます。人と人が関わり、それが地域に影響すること、これこそ社会学の意義であるとも。浅川先生の講演を聴き、災地に関する知識が乏しく、ボランティアといっても何をしてもよいかかわからない人々にも、具体的な問題点や、今後必要なことが理解できたにちがいないと思いました。



吉里吉里で、ゼミ生と活動を行う浅川先生（前列中央）

2013年度 学内学会事業報告

★会報22号発行

5月31日(金) 発行部数 5,500部

★第23回総会・特別講演会・懇親会

6月29日(土) 白金校舎 本館10階大会議場

総会には、学生28人、卒業生17人、教員7人の計52人が参加した。総会後の特別講演会では、社会学科教授の浅川達人先生が、「津波被災地復興支援活動と社会学—岩手県上閉伊郡大槌町吉里吉里を事例として—」をテーマに、講演をしていただいた。大震災直後より、2年以上にわたる活動の詳細を話していただいた。

★研究発表会

11月30日(土) 発表者は、ゼミ8件、個人参加9件(学部生4件、大学院生4件、卒業生1件)。発表者を含めて117人の参加者があり、今年も、3つの会場で活発な発表が行われた。

・第一分科会(1455教室)

「ストリートチルドレンからの脱却—ストリートチルドレンが社会に戻り自立するために必要な支援は何か—」

明石留美子ゼミ

「カンボジアでの人身売買の現状と予防策」

明石留美子ゼミ

「現代日本の若年未婚女性におけるライフコース展望」
府中明子(社会学専攻博士前期課程)

「戦後日本における『難病』政策の社会的形成」

渡部沙織(社会学専攻博士前期課程)

「学校教育における子どもの権利観とパターンリズム弱体化に関する考察」

石渡拓也(2012年社会学科卒業)

「宮古島市におけるひとり暮らし高齢者の生活実態」

河合克義ゼミ

・第二分科会(1451教室)

「南信州における観光まちづくりの歩み—南信州観光公社の体験教育旅行に焦点を当てて—」

石川雅典ゼミ

「東日本大震災からの復興—私たちはなぜ吉里吉里で活動するのか—」

浅川達人ゼミ

「皆で考える限界集落」

浅川達人ゼミ

「農家のこせがれネットワークについて」

坂口 緑ゼミ

「NPOと行政による協働—NPO法人親がめと横浜市を事例に—」

坂口 緑ゼミ

「労働時間の決定ルールに関する一考察」

沼田元明(社会学専攻博士後期課程)

・第三分科会(1458教室)

「松下竜一の社会運動—豊前火力発電所建設反対闘争を焦点に—」

小島佑加莉(社会学科4年)

「現代日本における介護労働者の不可視化された職業

意識—インタビュー調査に基づいて—」

奥井のぞみ(社会学科4年)

「日本におけるインド人コミュニティの形成過程—西葛西のインド人街を事例に—」

須貝祐太郎(社会学科4年)

「南アフリカ・アパルトヘイトから見る、パレスチナ・バイナショナリズムの現実的可能性」

鈴木康介(社会学科4年)

「『ビデオゲーム悪影響』の構築」

大嶋選也(社会学専攻博士前期課程)

★Socially22号発行

3月18日(火) 発行部数 3,400部

2013年度 学生会・活動報告

★社会学部スポーツ大会(担当 久能一也)

5月19日(土) 白金校舎アリーナ体育館

89人が参加して、ソフトバレーと台風の目の二種目で競技が行われ、各種目の上位3チームに賞状と副賞金が送られた。学年・学科の垣根を越えて大いに盛り上がりを見せた。

★「むかしMattoの町があった」上映会(担当 森田征弘・柳澤菜月)

6月10日(月)白金校舎大会議場で上映会を行った。イタリアでおきた精神保健改革を描いた映画で、3時間を超える上映時間にもかかわらず、学生53人、教職員8人、卒業生8人、一般12人が参加した。

★夏合宿(担当 堀江直史・渡辺雄気)

8月29日(木)・30日(金)の日程で、神奈川県箱根高原で合宿。参加者32人。1年生も参加して、秋学期の企画についての話し合いを行った。また、帰りには、箱根ガラスの森美術館や彫刻の森美術館を訪れ、自然の中で親睦を深めた。

★社会学科ゼミサロン(担当 堀江直史・渡辺麻理江)

10月14日(月)~18日(金) 白金校舎本館4階

社会学科在籍の2年生を対象に、次年度のゼミ選択に向けて各ゼミの先輩方から直接話を聞ける機会を設けた。ゼミごとのブース形式で行い、台風の影響のために一日少ない4日間の開催で、参加ゼミは17ゼミ、協力いただいたゼミ生は230人(のべ人数)、また、来年度履修予定の2年生は231人(のべ人数)が参加した。

★社会学科1年生コースガイダンス(担当 柳澤菜月・柳原紘子)

11月15日(木)横浜校舎で、横浜教務課の野田さんにも立ち合っていたいただき、1年生を対象に、履修コースについてのガイダンスを行った。実際の2年生が履修しているコース別時間割モデルを紹介したり、今年も、1年生からは好評だった。1年生の参加者は、昨年より多い96人。学生会福祉学科の委員を中心に11人が

運営に当たった。

★社会福祉学科卒業生と在校生の交流会（柳澤菜月）

11月16日(土)白金校舎で、学生会部として初めての企画の交流会を行った。卒業生18人、在校生21人、運営委員13人が参加して、和やかな中にも、福祉現場についての真摯な経験談や質問が交わされた。

訃報

2013年12月26日 社会学科 宮田加久子教授ご逝去。

異動・消息

2014年3月 社会学科 西阪仰教授、千葉大学文学部に移籍。

学内学会 新体制

会長	野沢 慎司 (社会学部長・社会学科教授)
副会長(主任)	渡辺 雅子(社会学科教授)
副会長	清水 浩一 (研究所所長・社会福祉学科教授)
編集担当	岡 伸一 (社会福祉学科教授)
企画担当	松原 康雄 (社会福祉学科教授)
会計担当	松井 清(社会学科教授)
卒業生部会委員長	竹村 祥(1972年卒業)
学生会部委員長	増口 達(社会学科3年)

2014年度 学内学会活動予定

4月1日(火)	新入生ガイダンスで広報(白金校舎)
5月28日(水)	第1回合同役員会議
5月21日(水)	新入生説明会(横浜校舎)
5月30日(金)	会報23号発行
6月7日(土)	社会学部スポーツ大会
6月28日(土)	第24回総会・特別講演会・懇親会
9月上旬	学生会部夏合宿
11月上旬	社会学科ゼミサロン
11月中旬	社会福祉学科1年生コースガイダンス
11月中旬	社会福祉学科卒業生と在校生の交流会
11月下旬	研究発表会
2月中旬	第2回合同役員会議
3月上旬	卒業生部会主催「春の講演会」
3月中旬	Socially23号発行

第24回総会・特別講演会のお知らせ

今回の特別講演会は、児童福祉分野の第一人者である本学社会福祉学科の松原康雄教授を迎え、十代後半の子どもたちに対する相談・居場所・生活拠点の支援について、お話をさせていただきます。

日時：2014年6月28日(土)
14時(受付開始13時30分)
会場：明治学院大学 白金校舎
本館4階 1455教室

1. 総会 14時～14時50分
議題：(1) 会長挨拶
(2) 議長選出
(3) 2014年度学会役員について
(4) 2013年度活動報告および決算報告
(5) 2014年度事業計画および予算
(6) その他
2. 特別講演会 15時～16時30分
講演者 松原康雄教授(社会福祉学科)
講演テーマ「社会的養護における年長児童への支援を考える」
3. 懇親会 16時45分～18時30分

編集後記

会報23号をお届けします。巻頭頁には昨年末に急逝された宮田加久子先生を偲んで、茨木尚子先生より追悼文を頂戴しました。つづいて、昨年度開催の「むかしMattoの町があった」上映会の報告と、浅川達人先生による特別講演会の報告を掲載しました。来年迎える社会学部創設50周年に向け、学内学会は各部会さまざまな活動を企画しております。皆様のご支援とご協力をよろしく願います。

(学生会部編集担当 社会学科3年 佐々木 茜)

お知らせ
社会福祉学科卒業生からの国家資格についての問合せは、学内学会事務局が、メールまたはファックスで受け付けます。後日、社会福祉学科に問合せ、わかる範囲で回答いたします。

連絡先：〒108-8636 港区白金台1-2-37
明治学院大学社会学部付属研究所内
明治学院大学社会学・社会福祉学会
E-mail shakaimg@soc.meijigakuin.ac.jp

※住所変更の際はハガキ又はメールでご連絡下さい。